



中村俊定文庫
文庫 18
783
2

中村俊定文庫
文庫 18
783
2





馬三勺集

秋之部

五秋

手はさしもてええ下秋のり秋の青
 名は秋ふぞ一葉ありあつたはる
 行はるるすゝるまはるるにわたりて秋
 初秋や世をくしそ別は秋の節に
 けつ秋やふ秋をくし一秋の節に
 初秋のくしにふくし一秋の節に



おのゝと流るるの池や池に夕影の好

七夕

吾もいづくはら好まわらぬ星を宵
初はくやむし一息風の吹いぬは
星を逢ふるや本むらゝの初乃海
松風の吹きささるや星今宵

舟歌

星は殊に浮き渡り乃池田小森下流し
彦星の望けらるるや子母川

稚水少々

越くま我らとて舟に浮きまを首
初はくやむし一息風の吹いぬは
うはまのほららにゆきせし河東
うはまの中へはと好まわらぬ川
うはまの葉もあはれりしはち星は秋
舟娘のめをきほはらけや天の川
と乃河を流るる如秋はち舟りたり

木忍乃池

そらりも一後しめは夜や蓮の巻

残果 華

ほろろの仇をれ多た時若く水
芥子不ふの屋をうさふれ時考り
華乃と一其うろほも葉子と程
朝霧の先ほく暮り(は)まはるり
あさほやわつはさきくくや
華乃朝日こくゆふ都く南

秋七柱

秋の巻もて好すはすに訓ふる程
さき春乃屋のみの影もあふ秋を
首けりれとけし秋をあつとす
人しは笑ふ時よあふ力花
星乃秋時よのほひの 葉のよ
れくおぬるも秋をいれやあふ
おはははははは。あふはははは
華乃と朝霧を秋もいれははは

文月 露

かき力やも休まそまゝを養は後
文力や津をうらふ縁接り
ふもほきのおろら久約瓶が
志る後には廻りあゝ梅は長らぬ

西行歌

まにう藤守こころ懐くおぼふまはかり
ぞすれいおぼもせむもおぼのま

佛いりりー 秋長おのり

と所乃當まらほしこれハ
とりのよらこころおちらむ
き程くる一箱一内三粒九粒
あやしのこころをこころをきほれ
とえはゆきこころをこころをきほれ
ふも後やも當もこころをきほれ
しほりも沖針もぬい松の雨
あはれのまもおけりもはほぬり
西上人の庵乃もなれり

新しきけはあらむとて
彼もえの浦水にまよ
ふとてかたむかひの
おほしきものもいふ
一町のまゝいふか
少くもいふか
ふとてのけもいふか

新記 結妻

よわいものもいふか

老いしものもいふか
新しきものもいふか
あつちのものをいふか
なつちのものをいふか
あつちのものをいふか
なつちのものをいふか
あつちのものをいふか
なつちのものをいふか
あつちのものをいふか
なつちのものをいふか
あつちのものをいふか
なつちのものをいふか

秋風やほろり守りても宇津の山
朝もや夕も霞もささげて
つたうそやきりくも居るもはたき

加茂

秋の夕やと秋社より秋の夕
霜妻乃と夕曾の朝一や清の暮
いぬつこやつるおとすらのほの紙
秋のあや行ゆれば人、夢来は
霜妻乃の娘、きり、清也者妻、橋

いふはれやいふも有一人、夢来は
霜妻乃の朝け、夕曾の朝、夕静の夕
秋のあや、秋の夕、夕曾の朝、夕静の夕
いぬつこや、つるおとすらのほの紙
秋のあや、行ゆれば、人、夢来は
霜妻乃の娘、きり、清也者妻、橋

雲

時、空ふらふ、秋の夕、夕曾の朝、夕静の夕
秋のあや、夕曾の朝、夕静の夕

遠く火や沙の跡を——是れ跡
精霊の手杖に——わがは月夜
精霊に吹やまを勢乃松のや
まの物や松小煙る。人乃松
一燈ふあきけい。まの果可鞋
也跡ぬのうまもふ。ほやまの力
送り火や。おれい。我見。何んか

病は無田に淋し

蛇す川も流く。おれい。まの果

演つ——い北の守りや。まの果
大の果。まの果。まの果。まの果
こまの果。まの果。まの果。まの果
おれい。まの果。まの果。まの果

生牙の魂 踊

生牙の魂。杖を。得る。生牙の魂
生牙の魂。杖を。得る。生牙の魂
頭の子に。杖を。得る。生牙の魂
おれい。まの果。まの果。まの果

相撲 萩 芭

自カ取月花乃名之名京也
子ノ自カありれ新ノ何んけり
いきい〜原ノ陰あや萩れ急
ノ新乃急接をいきい〜
小〜や差乃付〜ま即の茶
萩候や雨乃形き〜二月に
候候之〜を運ち〜保や萩巻
之流ニ科入ノ出〜何〜戸哉

う律〜梅ん〜形〜急落
卷す〜新お〜無〜萩れ
八月萩雨〜い〜男す〜萩れ
〜明や〜乃〜子乃山
七月十六日高野山

苔形〜ぬる乃〜佛り有
素言萩乃日おをい〜芭り水
植せに影〜はり〜
花薄乃乃植〜に

いふ程のわきまを教をれずき山
究竟乃男とて可程むじり那
人里や種もつる奴もはに刈つ薄

虫

啼く虫乃移く身もや枯の板
おもひ移りしとてあつ虫は春
虫春もきもあつ虫は春も
結る虫をさく尺へ居まはさあり
虫乃死あてありしと死ふり

本標や標形もあふ衆は春
啼く虫乃移く身もや枯の板
虫啼や虫をさく尺へ居まはさあり
虫乃死あてありしと死ふり

虫

古師ハハハハ啼く虫は蟋蟀
きりきりきりきり君もやわきま
女形志 虫形
女形花の美形もやに笑ふり

報典一ノハノ報一也ハカ女帝卷
心カ一カキ望以無日カ元次女帝花
一カ理カ不カすカ一カ一カ婦カカカ也
老カカ自カカ卷カ一カ見カカカ我カ首カ
カ一カ後カカカカカ一カ一カカカ一カ首カ

月

名月カカカカカカ一カ一カ山カ形
名一カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ
カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ一カ

名月カカカカ一カ一カ一カ一カ一カ
名月カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ
三カカカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ
以月カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ

名古屋カ月見

名古屋山カ木カ村カ有以カ一カ月一カ
尾カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ一カ
神カカカ一カ一カ一カ一カ一カ一カ一カ
院中カ一カ一カ一カ一カ一カ一カ一カ

残照也月亦ほしき深利の秋
映精もくは深淵を月夜に首
おとすさるやと乃世あるまじし

病中

死をれぬもさかたの秋月見
掃夢のまほとす深月夜に
十六夜や注ぐさるぬる廣

姨捨山

山乃月よみ天勢にわらふ

秋を曾さくし一秋月も際りの理
馬の程くやうもさる深月夜に
けくさるやほくさるさる秋乃月
明乃や家落けしにさるや
好乃あやしくさるは学は力
算のさるに秋のさるぬ力秋
もさるさる力乃算のさる
はさるのさるさるさるの力
乃や好のさるさるさるの力

行方乃西といふ所の形を
愛はまきと月乃を言ひたる
力なきと月乃を言ひたる
既しやいさとの神珠一

雄氷嶺

うこほやと云ふも月一
山陰にさすとも月一
三つ月一と云ふも月一

江多少

重入一はの初を短く社
伊勢乃海や遠くを社
うこほ伊勢の国

神垣や木乃宿遠の
き山やいせく出の
名月や若我名木
こぬ人を来ぬと云ふ
名月や宿。若我と云ふ
名月に結ひむと云ふ

既重や季お乃らほはる帯は
十六夜や帯を彫るを人の中
若月や帯を彫るはほはる
さほはるおありけふはるの月
いやはらる帯のあらはるの月
あ乃月を彫るはる帯あり
既重や帯を彫るはる帯は
神月を彫るはる帯あり
若月や帯を彫るはる帯あり
若月や帯を彫るはる帯あり

若月波六箇乃月以てせたり
秋乃月おまはるはる帯あり
三日同乃帯を彫るはる帯あり
十六夜や帯を彫るはる帯あり

伊勢ふた芭蕉翁一拜眼

十五夜をまはるはる帯あり
若月乃河原帯を彫るはる帯あり
若月乃河原帯を彫るはる帯あり
若月乃河原帯を彫るはる帯あり
若月乃河原帯を彫るはる帯あり
若月乃河原帯を彫るはる帯あり

改申や枯へ乃名を之鞠州
送越り系多踏の月影これ

桐一葉 木槿 芙蓉

桐乃葉のらゝかりとて夜ふた寺
山桐乃おもひとけ形一葉と種
む久れ乃きし形も影や桐一葉

藻人象少々

冬木槿の種とて流るる何れ
これ芙蓉のきし形をよまふ

後便尔笑おひりきよは芙蓉
海倉や芙蓉の乃枝と影も流

霧 秋乃言 秋字

霧雨や其を笑く市不入
朝霧や佛も沙をも流 秋
うらけす無山もむし秋乃言

これ人乃いにおもひ

唯舞 秋乃言乃けし

おもひの秋乃言乃けし

うたはしめたりし一帯も罷り野乃司
終乃而の義の面さく〜
何れ来乃来人〜
横芒を乃を〜
終〜や馬乃はけは終乃
終乃や尾花〜
子乃乃〜
あち終乃や月お〜

八朔 稲

八朔や松乃位若木乃又
八朔了稲は〜
八朔や冠の若木乃
八朔や首我〜
八朔や牡丹乃
終乃乃〜
終乃や種波〜
終乃乃〜
終乃乃〜

将乃秋 碓 麻

秋の夜やきよよのつまの人の文
あけの夜やづもねにさるるを
将乃秋や将乃秋も人も

よき光さすよ

住人よおのれ将乃秋の夜は
夕山や平松くやてききぬ
おのれよまはさ程すも
名もや平松くや今も

後山乃懐こし将乃秋の夜
雲乃麻もつる月と今も
啼麻の将乃秋よ
ハ九年一とらぬ直保と其の
はねとてつる将乃秋も
その子もつる将乃秋も
山端や其の将乃秋も
将乃秋 将乃秋 将乃秋
かゝるも将乃秋も

晴ちゆく方屋の好む百重を啼
秋の山眉かみゆきも秋風くれ
り色く如あきすく晴る秋の山
山ゆくこころとやさね子みよふ
るくくまみあふれおとも世山小
家なるのあきふと付く味覚は
くれふくイ鳥くくさみ候お素

鳥

雁啼やつ雁くう藤よりさつ男

雁啼やつ雁くう藤よりさつ男
きくちりけり星輝あきた下津雁
日くれやまゝ後をさふれお西乃序
初雁乃木木けり形くさ月如小
朱を遠り情のあさやあさあ存

冬情 歌

まげくす写輝ともくお後の里
晴るもあきふくれと鹿身し
ふたあきの初くくくら紫山小

何事もなしの心も
世に物もあらず
うたへんは
心の中
子掩

好魚

魚は
清能

菊

けふ乃
菊乃
唯氷

子志〜乃幸久〜お中世の昔に

〜新の〜〜色〜

〜さ〜〜さ〜

うか〜さや神話乃也に〜お花菊
〜〜葉枝子おと海浦乃管屋に
まふ湯焚て旅や〜さ〜そ葉七も
〜葉の無〜〜す〜葉は
〜おと伊勢路お〜秋菊乃葉
葉のまや〜〜さ〜葉乃

吉園乃乃花も〜り〜葉葉
お里や乃を立〜〜乃幸久乃花
新中乃さ〜程も〜まは九月
家庵乃乃花〜〜雨乃菊

後乃月

ま〜〜〜〜後乃月
色〜〜花乃花乃花乃花
〜〜乃さ〜〜乃花乃花乃月
花乃花乃花乃花乃花乃月

市神七層はきりし後乃月

二見乃海

喜阿弥若みのりすれぬまも九月
あはれいりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は

こぢり乃十三回後とらん

ほ乃乃空也乃海とらん

あまのりしやあも九月は

あまのりしやあも九月は

あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は

秋乃暮 行路

あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は
あまのりしやあも九月は

口下不々録

うきのもちやねとていふもあつぬ
ほろりおろおろ 借しやあは
うはくしの松も帯の柳花
秋海もまふも帯のあつぬ
しほくもあつぬあつぬ
秋のりおろあつぬあつぬ

油田のりおろあつぬ

鯛の啼しやあつぬあつぬ
こもあつぬあつぬあつぬ
山里や結ばあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ

海智のりおろあつぬ

正徳の秋も海智と泊りの秋
光明寺あつぬ
秋のりおろあつぬあつぬ

卷乃葉もむ乃敷形逢子枝秋
針度子枝子子子何乃理花秋
葉津乃影もむ枝重根子子
津乃尖枝波乃公形寸世言子
涼乃乃枝時や枝少子子
乃由尾字を候や子玉や分枝後
嵐乃葉枝出乃啼秋乃陸乃枝
月乃更のい子乃枝乃野乃武
若乃子枝いきも枝ぬ乃乃枝日和

和歌乃浦也

此層の枝はくへありく之和歌の神
木枝刈何をくくくくく
逢生や子枝中葉枝重子
枝枝乃十尔い枝、若葉きり
子き枝了子子追枝乃子
廟主乃乃也や浅廿月乃
葉乃乃合何のく
枝麻や刈あけ乃乃。若乃

こゝろも秋もも那に死ばくり
結撰不短きれを家多事此の如
山之後の秋や之を杖つゝ鬼しは里
余はくし乃こゝろ言は過り秋もや

伊勢より

鬼神もこゝろ新造し人法廷之ま
い勢も居くまはれめろ丸き九月

号三句集

冬乃部

時雨

猶乃葉もはるまじ日迄や初時雨
半そけかゝる名乃いこゝろこゝろ
逢坂乃つ井も景初時雨この如
時雨も候りあゝ冬程こゝろ山
松乃木枝後千いも時雨人
さるゝもれ初めもあゝ初まき

義仲さまさす

淡海乃あふさう神一物時自
ら素すいんみけきあつて雨
しくちやあふさう千人のあふ裁
夕山やあつて雨一雨雨
多うはくあふさうあふさう
雨あつて雨あつて雨あつて雨
高乃あつて雨あつて雨あつて

川首上人乃あつて雨あつて

おあつて雨あつて雨あつて

あつて雨あつて雨あつて

しくあつて雨あつて雨あつて
深産の川上よのあつて雨あつて
橋人ふしあつて雨あつて雨あつて
神雨あつて雨あつて雨あつて
あつて雨あつて雨あつて雨あつて
あつて雨あつて雨あつて雨あつて
あつて雨あつて雨あつて雨あつて
あつて雨あつて雨あつて雨あつて

とや我志

十月言や一久礼乃松と云ふ
神楽にやゆふ守ふおの時言哉

時言佛ふ籙の美と云ふ

枯るまやおのりふふふふふふ
いぢふふふふ換山よと云ふ
是乃冬や神の神してふふふ
年中ふふふふふふ神言月
是もはふふふふ神言月

十月や山乃おおにふふふ
十月乃空や廣一の神の志
十月や春のふふふふ
十月やふふふふふふ
十月や春のふふふふ
十月や春のふふふふ

留り花 山は葉

うふふふふふふふふふ
あのかはつふふふふふ

いよ〜ふりてんきさしきしり
在りて遠に笑ひけし〜水帰るる
聖乃りて〜世も〜
帰るる花鳥〜
〜
治甲智平〜
将川や〜
志賀方杖訪ハ降春法木葉ハ

峰乃りて〜

桔野 水鳥

横尾も〜
焼飯乃り〜
得是る〜
酒飲小〜
水鳥也〜
追け〜
今年〜

形啼や茶と煮て眠く位解堂

存 結尾花

存 物やなきる勢は理中枕
くく物は何も好むは乃家
存 近乃余念必はす口唇
結尾美人乃通しぬ結も
結尾花何もかふを月心
いさく物重をまわくも結尾
結末れはこたに棠何も尾花哉

非たそく尾花さつろ恒根う程

霜

未さく起しはさよふ霜乃朝りれ
霜乃霜何そく入つて打る

病中

鳴くや枕ありふふ霜乃打
泊清ふ吹きハ野々枝乃霜
まきみさくもやあしき霜は牙

物さしおふ霜枝は枝

吹きつりてはげしはるは夢さうれ
三井乃清露乃高なる夢さぬ
くしふ葉ふふ葉くは葉ぬらぬ
人さるのやわふけしは汗跡
露乃さうくはは根やとすれえ
そと人のもはふふさや葉は松

風 寒 苦 多

あうしにが持水くははふ里か
本かしのあ乃さうや葉乃さ
あ乃や葉は古の風さう葉多

つぎ葉多さうにさと帝れぬ
本名じん我あくさむ葉乃さ冬

雪

初雪さうりふはるは初日
葉根さうは葉は葉に上理やに多
雪乃さうや月さるはさくさう
里人さうはるはさの雪名れ
うけは夢れさうやせんは佛
雪乃さうやおはおははは乃
さうさうはさうはさうは乃

分別をせしむるに
多敷くは港一
持て出た山を
いふねさハ中
初まのやま
海合とて
等早の箱古
をたのやか
字枕をよ

はとささつ
をたのやか
初まのやま
をたのやか
字枕をよ

降る雪の初をぬく上河一途に
名を承不深ええも女と子 枕

宛 二女(子)

山程をいけり—ふりや去りて
小衣を脱ぎ去りて降る雪
うすくはれればと馬も喚れり
山すや—雪鞋をく—きりぬる

冬玉 髪二垂

不二の海歌日とさういふは女玉

活下居歌程とてい—冬玉うれ
程風をたれればとや—は冬玉
—は海に梅も冬玉
—は雪や東と冠波の浪や—
髪も雪やきけり梅も梅も

子鳥

木のくきとらふ子鳥を
か茂川や雀もさういふ友を

竹深く

川旁乃ふるもさ乃木達道先
おる中にとりし形や夕子
磯子角角寸数にまじり
云巻とむすふつとまじり
念ひよぬといひもや
交つてのむすふつとまじり
伊予もやいふ事やいふ事
原念葉つてのささふ及ふ
念 命 中

若う代や原新念とすは
はく動もさるえ七代一命
念 命 中

氷

子孫業子飯食こほす字りれ
指乃字にこめぬ字行り那

石乃西登為

研字一祚乃ちくく人れあ
一法人を依えに中ぬ字行り
法きより氷下流く乃再裁
平氷ふ字の産さるや流り里
三行し流舟めくくはく丘乃松
室の空り都乃流字水る秋在

いちげやく氷る女れあや若る流
水るさ人のりあふく受へく
流氷る流字ふ富屋あわら

冬籠 火焔 珠叩

芋居字、枕名せく冬籠
冬籠字、志やの事あ、名あく
あ形く、くはく、流字冬籠
武限乃秋葉、ひ、焚出火焔
冬と、拍子、水、形、流、き

か七河乃河家成りて河を清く

冬

冬廿日乃抄りて河を清く田能轉

治花乃

冬をくくしけくくくくくくく

冬乃乃日影人ふおまてくくく

任吉

松乃乃松乃乃松乃乃松乃乃

甲斐國上流會

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

不惑分

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

冬乃乃冬乃乃冬乃乃冬乃乃

空しきもの笑ふも泣くもあはれ
夏荷や入衣さへむすはれ
人乃来さう人乃帰らぬ桐火踊
拵手ぬき字にほつ時を待たぬ
端のや爪をたあふ流る寸草鞋
春戸乃来葉も鳥乃羽色に結ぶる
里人ぬき藪草さへいはいはれ
うはらさや先赤座より花
啼くくを嘆ひもすしんを乃飯

山は陰や半そとの借りの指事
口切やまの舌よりあまの舌に
小方原乃近おをせはる冬白
冬由しくくはるまじやまは湯
絶代おまもぬくも静なり
蕨の陰乃歌草はと歌く十和哉
あふ時といふぬき色も葱も
冬枯の草にわらわ乳車も
つもふあまもぬくも静なり

空也忘、も持ふ事、道、

夢、事、任、少、也

昔、事、の、也、あ、ら、う、く、は、島、に、住
い、る、者、も、色、人、目、の、か、ら、違、常、事、の
ま、ち、に、住、ん、だ、り、ま、た、物、入、は、ま、り
物、の、か、ら、ま、た、ま、た、ま、た、何、れ、を、我
は、い、へ、る、は、ま、た、に、か、ら、深、く

甲斐國といふ

山崎の師老は、我、省、乃、郡、と、乳

煤、掃、
追、催

高、砂、や、煤、乃、我、の、業、と、我
煤、掃、や、水、乃、深、く、ま、ま、つ、
吾、と、近、方、に、有、啼、門、田、我
手、持、ら、う、い、は、は、ま、り、年、以、重

年内、壬、辰

阿、是、如、也、是、多、神、事、一、山、乃、月
才、は、ま、り、下、形、不、有、明、の、少、也、と、乳
壬、辰、乃、ま、り、の、八、年、於、廿、日、我

福山

年乃東女取さう入る事難らる
り子や父のあつたを止るらん
ゆゑとて未二乃紫山一は雲之
以年乃強代あゝ寂業層式

科乃部

やゝ我道に於る子や未祥淳
すゝふふ乃我等筑基不二
是理井乃右もらるる都の難

科 志字もやゝとてやま
あゝ新さゝし志志さうり一當り
飛經禮あやる芳と大人はゆゑ
此世乃之者たきゝそ新難事
左乃志難味ぬゝゆゑそ新
字於ゝゝとあゝとらるる
お東連あやる久あゝとらるる

經本亦安... 年... 字...
其... 字... 未... 左...
新... 堂... 後...
事... 如... 毛... 乃...
未... 終... 之... 為

安... 乃... 以...

形主黃維家選
伴成堂為則書
彫工黑川友三市鑄

文政二年己卯冬十月

嶋主庵主藏板

